



地域の現況・課題

浦島地区は、尾道市南東部の浦崎町、百島町と福山市西部の金江町、藤江町からなる。地区の海岸線には、国や県が整備した人工干潟が複数あり、アサリ等の二枚貝の生息場、魚介類等の産卵・育成場として機能している。



しかし、近年、アサリ等の二枚貝資源が大きく減少し、干潟の生産力や生物多様性機能等の劣化が懸念されている。アサリ等資源の減少は、①干潟における砂の移動、②クロダイ・エイ類等による二枚貝の食害、③アサリ資源の減少による稚貝供給量の低下によるものと考えられ、その対策が求められる。

連携の経緯

上記課題のなか、平成25年度に、地区の漁業者が主体となって「広島県東部アサリ協議会」を結成し、アサリ資源の再生を目的に干潟の保全活動をスタートした。保全活動の内容は、①網袋を用いた効果的な稚貝確保、②被覆網による稚貝逸散防止・食害対策であり、現在、これら取組によりアサリ資源の回復が認められるようになった。

ただし、この成果は食害等から二枚貝を保護する被覆網区画によるもので、活動の継続が求められた。しかし、現在、作業に従事する構成員の年齢は75歳以上が主体で、高齢化にある。そのため、5年ほど前から活動の継続が懸念され、その対策が大きな課題となっている。



被覆網による保護対策

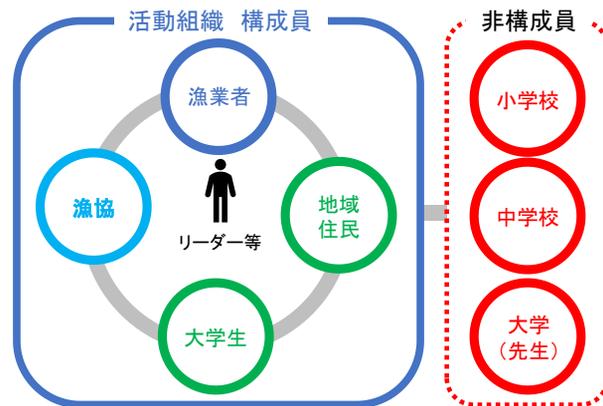


網袋による稚貝確保（兼 砂の移動対策）

連携体制づくり

当組織の構成員の高齢化が深刻化する中、地元の中学校において、全校生徒が地区の基幹産業である農業や漁業などのグループに分かれ、各々自らが地域の協力を得ながら活動を実践・学習するカリキュラムが始まった。また、このうち漁業グループが、当地区の漁協から干潟の一部に区画を借りて、実際にアサリを自分たちで育てる取組を行う中で、浜にいる漁業者と出会い・交流するようになった。そして、これをキッカケに、組織との連携をゆるやかに構築した。

当組織の学生との連携は、大学や小学校とも進められている。大学との連携は、当組織の代表等と付き合いがある大学の先生から保全活動に対する技術的な要素を教えてもらったり、コロナ禍の中、海の水生生物を調べたいと飛び込みで漁協に訪問してきた学生を組織で受け入れ、一緒に活動を行ったりしている。また、小学校との連携は、平成30年頃から開催している干潟観察会を通じて連携体制を深めている。



| 主体 | 各主体の役割 |
|-------|---------------------------|
| 漁業者 | 保全活動の主体。学校等への支援。活動の技術継承。 |
| 漁協 | 事業の運営。学校との調整や体験学習の場の提供。 |
| 地域住民 | 保全活動における作業支援。体験学習のサポート。 |
| 大学生 | 保全活動における作業及び技術支援。 |
| 小学校 | 干潟生き物観察会の実施（運営協力）。活動への協力。 |
| 中学校 | 保全活動における作業支援。地域学習の指導要請。 |
| 大学の先生 | 保全活動に係る技術支援。 |

連携による取組内容

ここでは、特に大きな連携のイベントとして実施された「鉄粉だんご」の製作・散布に係る事例を紹介する。

当取組は、海藻類の増殖を研究する先生が、二価鉄を添加することでアサリの餌となるケイソウ類が増殖すると云う情報を聞いたところから始まる。また、構成員として参加する大学生が水産高校時代に、使用済みカイロを原料に「鉄粉だんご」づくりを経験したことがあり、そのレシピを知っていたことから、取組が具現化した。

当だんごの原料は、使用済みカイロであり、一定量散布するためには、まとまった数量を確保する必要がある。そこで、連携する小学校に連絡し、使用済みカイロを500袋ほど集めてもらった。また、中学校の漁業グループの児童に当取組を紹介し、一緒にだんご作りを行い、計900個のだんごを干潟に散布した。



連携の効果と今後の方針

大学を含む学校との連携は、高齢化にある当組織の保全活動の一助になっている。また、子どもたちが干潟の保全活動を漁業者と一緒にすることは、当地区や自然環境への愛着心、また技術の育成につながっていると思われる。加えて、構成員の取組に対するモチベーションの維持にも大きく貢献している。こうした学校との連携が、今後も継続的に図れるよう、積極的に交流を進めていきたいと考える。